

S. R. ブラウンと新資料の発見により知られる 「馬可傳福音書」の和訳

中 井 純 子

はじめに

2003年に米国において馬可傳福音書の和訳稿本が、当時、米国聖書協会の日本スペシャリストであったErroll Rhodes（エロル・ローズ）博士により発見された。これは、現在、草稿の存在が確認される、プロテスタントによる聖書和訳史上、日本本土でなされた最初のマルコ傳福音書の翻訳であると思われる。

Rhodes博士によれば、本稿本は長期間Emory University（エモリー大学）のコレクションの一部であり、1885年以前のある時期からHartford Seminaryが所蔵していたものを1975年にエモリー大学、Candler School of Theologyの Pitts Theological Libraryが入手し、1989年に古文書部 Archives Departmentに移した。2003年8月に Philadelphia Rare Books and Manuscripts Company がエモリー大学から委託され、それを米国聖書協会が買い上げたものだという。現在は米国聖書協会の蔵書であり、ABS Manuscript of Mark（以下 ABS Mark）と名付けられている。⁽¹⁾

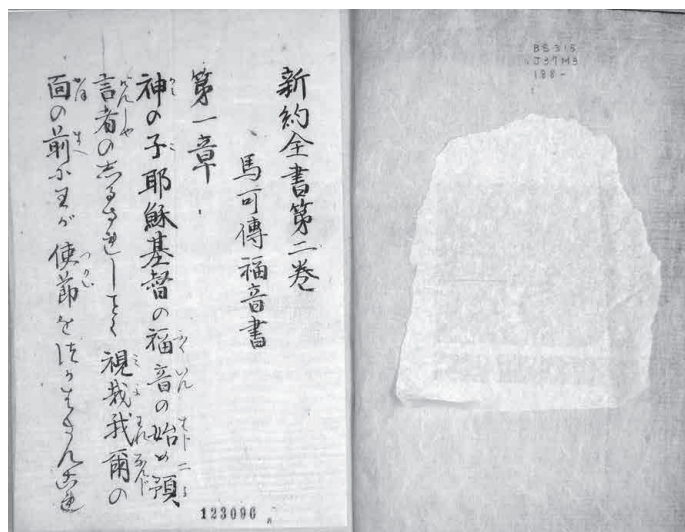


図1 ABS Manuscript of Mark 馬可傳福音書稿本
米国聖書協会所蔵

この稿本は、ローズ博士のご厚意により、最初に筆者のPhD論文 *The Japanese Bible: A Historical and Analytical Study of Its Development with Particular Focus on the Period 1837-1888* (マンチェスター大学 2007年) において分析考察するよう勧められ、考察の結果、Samuel Robbins Brownの訳業であると結論づけられた。拙論は、米国聖書協会の学術機関であるNIDA Instituteの企画になるHistory of Bible Translation (HBT) シリーズの一分冊、Japan Monographの一部として出版が予定されているが、今回、その出版に先立ち、日本の研究者の議論に供するために、日本語で本稿を起こすことを計画し、HBTシリーズのPhilip Noss総編集長に相談の結果、ご快諾いただけた。ここに心から感謝して、以下紹介したいと思う。

新資料 『馬可傳福音書』 稿本

新資料『馬可傳福音書』の稿本は、縦17.5cm、横11.5cmの和綴じで、一頁に縦書きで6行書かれ、1行は15から17文字である。全270頁にマルコ傳福音書の16章が収まっている。

『新約全書 第二卷

馬可傳福音書』という標題で始まっている。

この標題は、この和訳が単に福音書を和訳したものにとどまらず、新約聖書全体の和訳を目指す中での、第二卷であることを示している。漢字が多用され、一見、漢文訓読体かなという感じを与えるが、漢字には脇に平仮名のフリガナが施してあり、平仮名を読んでいくと、文章は、和文が基調になっている。ところどころ口語体の混じった文章である。

筆記は、1872年刊馬可傳福音書のような流麗な草書体ではなく、楷書に近い行書体である。奥野昌綱の筆と思われるが、そう考える根拠としては、一見、異なる人の書体と見えるが、じっと、その書体を見ていると、両方の草稿にある同じ字が重なってきて、同じ手による異なる書体であることが見えてくる。次の頁の写真にある同じ字、例えば、「耶蘇」という字をABS Mark, 1872年刊の馬可傳福音書、さらに、春日政治発見の馬太傳福音書（17頁参照）の草稿で見ると、三者に同じ筆致が感じられるのである。そのうちABS Markは、時代的に一番古く、漢字が多いために、奥野もやや改まった、楷書に近い行書体を用いているのではないと思われる。「評判」、「城下」、「群集」などの字でも同じ筆致が認められる。

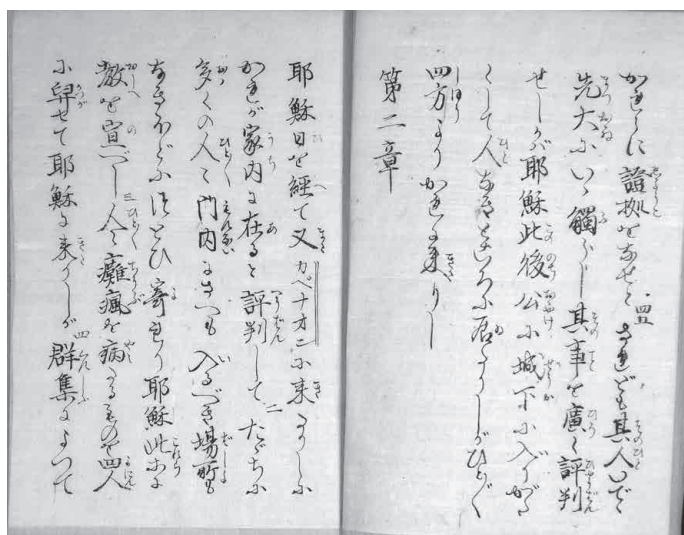


図2 ABS Manuscript of Mark 馬可傳福音書稿本 第二章
米国聖書協会所蔵

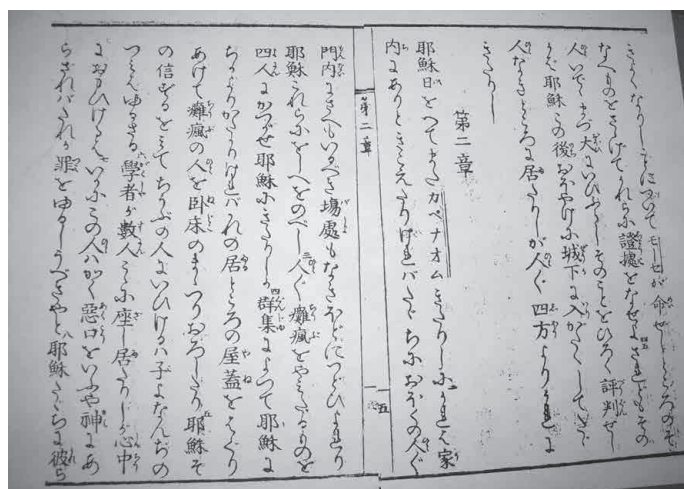


図3 1872年刊 馬可傳福音書 第二章
同志社大学図書館所蔵

S. R. ブラウンと新資料の発見により知られる「馬可傳福音書」の和訳

標題と、奥野の改まった筆跡から、この稿本は、下記の『クリスチャン・インテリジェンサー』に報道された、1866年には印刷用に準備の整っていた和訳稿本（本稿7～8頁参照）であると思われる。Otis Cary O. ケリーは、「その福音書翻訳作業は、多分、S. R. ブラウン博士によってなされた翻訳を言っているのであろう」と記しているが、その推測どおり、S. R. ブラウンの訳であると思われる。⁽²⁾

S. R. ブラウンについて

Samuel Robbins Brown サミュエル・ロビンス・ブラウン（1810-1880）は、天賦の音楽性と言語学的才能に恵まれた、米国オランダ改革教会の日本への初代宣教師であり、1859年11月に神奈川に到着、2週間先に来日していた米国長老教会の宣教医 James Curtis Hepburn ジェイムス・カーティス・ヘップバーン、日本での通称ヘボン（1815-1911）とともに、成仏寺に居を定め、禁教の高札下、まず、日本語の習得に集中して活動を開始したことが知られている。やがて、近代化を模索する徳川幕府の要請に従い、その学問所の通訳者や、将来を嘱望される青年たちに英語などの教育を施し、類まれなる教育者であることも実証した。新潟・横浜で教えた明治政府の学校とは別に、聖書に興味をもつ青年を自宅に招いて、その質問に答えたことに端緒を発するブラウン塾は、日本で最初の神学校となり、日本のキリスト教界を牽引する多くの青年指導者を輩出、後に明治学院神学部の前身の一つとなった。「わたしの学校で、二十人の日本人説教者が教育されたんですよ。このことは、二十人のブラウンが世につかわされたことを意味します。この人々は、わたしがするよりもどんなにかすぐれた、大仕事をするでしょう」とは、ブラウン先生の弁である。⁽³⁾

ブラウンは多彩で、『西洋紀聞』を3篇の英文に翻訳した。⁽⁴⁾

方法規定

聖書の和訳に、ブラウンは志をもっていた。しかし、その個人的な訳業については、これまでほとんど知られていない。今回は、歴史資料のリサーチと、新資料のテキストの比較対照分析により、本資料の特徴、及びなぜそれがブラウンの訳業であると考えられるのかを考察していきたい。最初に、ブラウンの聖書和訳に関する記述、及び初期の馬可傳福音書に関する記述を、歴史資料の中から見ていき、その結果を、新しく発見された馬可傳福音書稿本のテキストの分析により検証したい。比較対照分析の対象としては、当馬可傳福音書 (ABS Mark) の他に、今まで、最古のマルコによる福音書の和訳とされてきた1872年刊の馬可傳福音書、さらに1941年に春日政治により福岡で発見された「馬太傳福音書」稿本の転写本と比較して考察する。

歴史的叙述より

ヘボンは、1861年の書簡に、ブラウンとの共同作業に関して、漢訳聖書と、日本人助手の漢文の知識が、進行中の馬可傳福音書の和訳に助けとなっていると書いている。⁽⁵⁾ 1863年4月29日のJ. C. Lowrie (ラウリー)宛ての手紙では、彼は、馬太傳の和訳を始めたと記している。⁽⁶⁾ これらの記述から、ヘボンとブラウンは、1861年から1863年の間に、馬可傳福音書の和訳を共同して行ったことがわかる。

ブラウンは、1865年10月31日のJ. M. Ferris (フェリス)に宛てた手紙に、日本人の二人の助手とともに行う和訳の作業順序を報告している。彼の二人の助手が漢訳聖書からの和訳をした後に、ブラウンがギリシャ語やヘブライ語の原典と比べ、その上で、助手とともに、改訂を行う。⁽⁷⁾ ブラウンは、さらにこれを他の同僚に送り、チェックとコメント、批判を仰ぐつもりであった。⁽⁸⁾ 1866年には、幾つかの福音書の出版に準

S. R. ブラウンと新資料の発見により知られる「馬可傳福音書」の和訳

備を整えていた。1866年3月30日にブラウンは、J. M. フェリス宛ての手紙に書いている。

聖書翻訳の仕事は、わたしがやらねばならぬことであり大事業だと思います。同時に、わたしの力の及ばないことを、切実に感ずるのです。神の言について知性に合った翻訳をするには、ヘブル語とギリシャ語のみならず、日本語の広汎な知識を要するのです。これらの資格は、かなりな、そして不断の研究なくては得られません。もし、神が、わたしにこの仕事を達成させるだけの寿命を与えてくださって、英語の聖書が、英語を語る諸国民に与えた感化と同じものを、この国民のものとならせることができるならば、教会が、わたしを日本に派遣したことはむだではなかったことがわかるでしょう。ところが、どうも、いろいろ仕事に追われて思うようにできません。もしそうでなければ、わたしの志すこの目的に、直ちにかつ着実に専念する時間もあるのですが、残念ながら、すっかり雑事に煩わされてしまっているのです。⁽⁹⁾

ブラウンは、J. M. フェリス宛に、1867年2月にも書いている。

マタイ福音書を4回も改訂し、書き直しました。今また、マルコ福音書を3回も改訂しています。できるだけ忠実に、正しく、かつ平易に訳したいのです。⁽¹⁰⁾

1866年5月24日の*The Christian Intelligencer*誌には、在日宣教師から米国改革教会に宛てた、“Call to Prayer”と題する「祈り」を懇請する内容の訴えが載せられている。福音書の和訳完了を報告しつつも、「聖書の言葉を読んで改宗した者を、その家族もろとも死刑に処する」という日本の禁教政策に直面し「出版するか、否か」でジレンマを覚える宣

教師の苦悩を伝え、外交のトップレベルで、日本政府に対して「宗教の寛容」を求める必要があることを論じている。⁽¹¹⁾

The work in Japan has reached a point of thrilling interest. The gospels are translated. The money is ready to print an edition. One soul has been converted - the first sheaf of the harvest has been gathered into the heavenly garden. *Shall we print the gospel?* The missionaries hesitate, fearing bloodshed.

For, by the laws of Japan, whoever may be converted by reading the Word of God may be put to death, with all his family...

Now, shall we print the gospel in Japan? Yes, if the Church will pray.

日本における仕事は、固唾を飲むような興味深い点に到達した。福音書の翻訳は完了した。その日本語版を印刷に付す資金も準備できた。一人の魂の改心をえたー収穫の最初の束が天国の庭に集められた。われわれは福音書を印刷すべきであろうか。宣教師団は、躊躇する、流血の惨事を恐れて。というのは、日本の法律によれば、誰でも、神の言を読んで回心した者は、その家族ともども、死刑に処されるかもしれないのであるから...

さて、われわれは日本で福音書を印刷すべきであろうか。然り、教会が祈ってくれるのならば。(拙訳)

しかし、その決断が下される前に、事は落着いた。1867年に発生したブラウン家の火事により、翻訳の草稿を、他の図書と、翻訳のメモとともに、焼失してしまったのである。長年に亘り、精魂込めて蓄積した訳稿が一瞬のうちに灰燼と帰してしまったのを目撃した衝撃は、察するにあまりある...失望落胆、虚しさ、善と悪の争闘の熾烈さ、出版は時

期早尚であったのか、神がこの悲劇を許されたのかなどという疑問の数々…

ところが、馬太傳福音書と馬可傳福音書は、山上の垂訓に感銘を受け、筆記したいと借りだしていた薩摩藩士の手中にあって、焼失をまぬかれた。⁽¹²⁾ 現在の私共が、聖書和訳史をつまびらかに辿れるのは、この侍の一件に預かるところが大きい。その二つの福音書の稿本はブラウンがたまたま4回改訂をしたものであった。それらを、ブラウンは、1867年5月の一時帰国の前に、当時始まろうとしていた各派宣教師の共同作業としての聖書和訳の役に立てるようにと、ヘボンに託して米国に発った。⁽¹³⁾ ブラウンが再来日を果たすのは、二年後の1869年8月の新潟への赴任であった。

聖書和訳に心を馳せ、戻ってきた日本では、ブラウンを議長として1872年に第一回プロテスタント宣教師会議1872年9月20日—25日が開催され、聖書翻訳委員会が組織される。訳業に参加を希望する各教派から一名ずつ委員を募り、ブラウンは、その委員長に選ばれる。

新約聖書翻訳委員会による聖書の和訳は、1874年に開始され、1880年に完成する。終始、在日宣教師団代表者としての役割を果たしてきたブラウンは、病気のため、新約聖書訳了間際、自分の割り当て分を果たして、1879年に米国へ帰国し、翌1880年、新約聖書和訳の完成の報を受け、静かに眠りについた。

翻訳委員社中による新約聖書の和訳には、委員長として指導的役割を果たしたブラウンであったが、宣教初期の個人訳に関しては、これまでブラウンの訳業の実体について知られるところはほとんどなかった。

新資料—馬可傳福音書（ABS Mark）の文章の特徴

これまで、聖書和訳史上、日本本土で行われた最初のマルコによる

福音書の和訳は、1872年刊のヘボン・ブラウン訳「馬可傳福音書」(1872 Mark)であった。しかし、今回1872 MarkとABS Markの比較分析により、次のことが明らかになった。

1. ABS Markは、1872馬可傳福音書より古い。これは、1) 漢字の多用、2) 平仮名に見られる古い形、3) 漢文体の影響が濃いことにより知られる。以下は両者比較の例である。

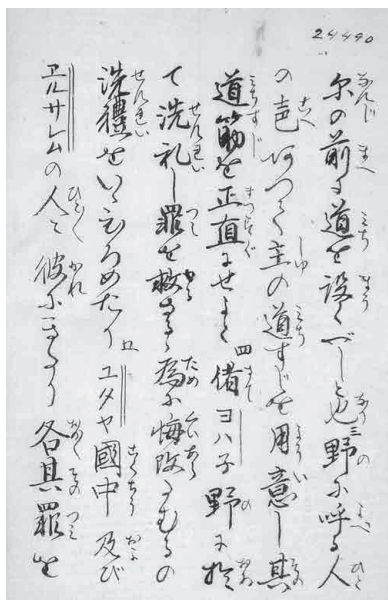


図4 ABS Manuscript of Mark
馬可傳福音書稿本

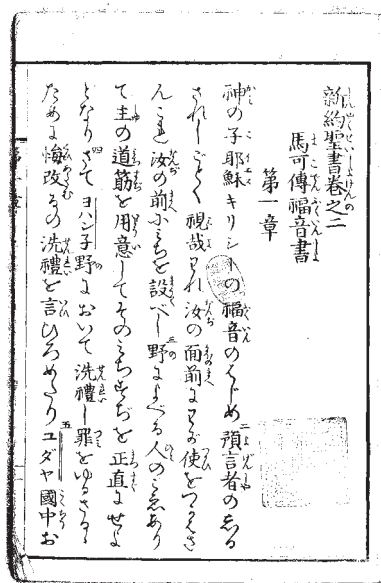


図5 1872年刊 馬可傳福音書
同志社大学図書館所蔵

	ABS Mark		1872 Mark
1) 漢字の多用	耶蘇基督	vs	^{イエス} 耶蘇キリシト
	其	vs	その
	^{おどろき} 駿愕て		おどろき
2) 平仮名の中に見られる古い形			
	古連 (これ)		こ連
3) ABS Mark には、漢文体の影響がより多くみられる。			
	1872 年馬可傳では、和文化されている。		
	而して、		志かして
	野に往 ^ゆ かしむ		野にゆかしむ
5:5 衣服して (中国語をそのまま動詞に使用。			
	中国語では動詞として機能しても、日本語では「衣服する」は不可。)		

2. ABS Mark には口語体が混じるが、1872 Mark は、易しい文語体を用いて、より洗練された和語表現を多用する。

	ABS Mark		1872 Mark
	声阿って	vs	声ありて
	海を渡って	vs	海を已たりて
	^{ふしい} 臥居たりしが	vs	臥居たりしに
	小舟を用意しておくと	vs	小舟をそなへおくべし
	その門徒に命じたり		

次に、シンタックス、或は、統語⁽¹⁴⁾、即ち、語と語や、句、辞をどのように組合わせて(統語して)文を成し、文としての表現をしているか、また文と文との関係を見ると、統語上の特徴として、ABS Markと1872 Markに差異がある場合には、一般的傾向として、ABS Markは、ギリシャ語原典の語・句・節の順序に従っているのに対して、1872 Markの場合は、日本語生来の自然な順序を重んじている(Mk11:23など)。この事実は、ABS Markの訳業が学問的で、ブラウンの関与を強く物語り、他方、1872馬可傳には、ヘボンの、日本人助手とともに訳文を日本語文章としてこなれたものにしていく一貫した努力が窺われる。

ABS Markの訳者

ABS Markの翻訳者をS. R. ブラウンとするには、幾つかの理由がある。最初に、ABS Markは当初、日本人の助手により漢訳聖書から和訳されたものを、日本人以外の翻訳者が、ギリシャ語原典を参照してチェックし、改訂したものであると考えられるが、ブラウンは、馬太傳福音書と馬可傳福音書は4回も改訂したと述べている。⁽¹⁵⁾

第二に、ABS Markのテキストは、1872 Markより、メッセージの内容のみならず、形式の上でも、できるだけギリシャ語原典に近い和訳をこころざしている。これは、当時の聖書翻訳、特に米国聖書協会が示した日本語聖書翻訳の方針が、「日本語の自然さが損なわれない限り、許容できる範囲で、できるだけ字義どおりに訳す方針をとるように」と助言していたからであった。⁽¹⁶⁾ 原典に近い翻訳という意味では、ブラウンの訳を底本とする馬太傳福音書でも、一貫して学問的なアプローチをブラウンはとっている。1867年4月に、家の火災で翻訳原稿や、貴重なメモや図書をすべて焼失した後で、ブラウンは、米国から、Tishendorfのギリシャ語新約聖書を、特に、1849年版か、より新しい

ものを送ってほしいと依頼している。これも、ブラウンの学問的な姿勢を示している。ブラウンに比して、ヘボンも、日本語の自然な流れを大切に和訳をしている。これは、日本人助手への依存度の高さを表しているのかもしれない。

第三に、ABS Markに顕著に見られる口語体の混入は、ブラウン訳の特徴の一つであると考えられる。ブラウンは宣教師の働きの第一の急務を次のように述べている。

あらゆる階層の日本人の読者にすぐわかるような文体で、しかも格調の高い神の靈に満ちた言葉で真理を伝えようような、そうした日本語聖書の翻訳をするということです。これを完成するために、わたしたちは、別々に時間をさいて、翻訳の仕事にたずさわって、わたしたちの能力の限りを尽くします。こうして、聖書の部分訳を完了したら、お互いに翻訳文を比較し、批評し、改訂し、会議の上、ある一つの標準的な翻訳文を決定して印刷にかけ、日本人に配布するようにしたいのです。⁽¹⁷⁾

ブラウンの俗語を含む口語体への傾斜は、来日して早い時期から現れる。それは、ブラウンが日本語研究のために、また後進の英語学習のために1863年に出版した*Colloquial Japanese*『日英会話篇』にも見てとれる。音楽に秀でたよい耳に恵まれたブラウンは、日本語に文語体と口語体があり、さらに、口語体の中にも、話者と聞き手の関係や、身分、職業、姓などにより、2種類も3種類もの異なる文体があることに気がついていた。この辞典には、一種類の英語表現に対して、日本語の会話で耳にする、2-3種類の異なる日本語の口語体の例文を載せてある。口語体をあらゆる人とのコミュニケーションの効果的な媒体と考えていたことがわかる。日本語の題は一説に、『英和俗語辞典』となっているが⁽¹⁸⁾、挙げられている例文には、俗語ではない、丁寧な話し言葉も含

まれていることを指摘しておきたい。

このテキストを使って、通訳生として日本語を学んだのが、後に卓越した外交官として活躍するアーネスト・サトウである。来日早々、日本語を習いにブラウン宅を訪れると、ブラウンは、印刷し立ての『日英会話篇』の校正刷の数ページをサトウに渡した。⁽¹⁹⁾それがブラウンのサトウへの日本語指導の初めであった。サトウは1901年に北京から W. E. Griffis グリフィス宛に書いている。

ブラウン博士の教育はわたしにとって一番大きい助けとなりました。そして学生通訳が身を入れて学ばねばならぬ公文書の勉強とは別に、日本文学に対する趣味を徐々にわたしの中に染み込ませてくれました。彼はとびきり親切で信仰の深い先生でしたから、先生のお助けなしに日本語の修得に進歩を加えることは、きわめて困難だったでしょう。なぜなら、当時は口語文法の形をとっている書物は一冊もなかったのですから…⁽²⁰⁾

最近の新聞に、ケンブリッジ大学図書館所蔵のアーネスト・サトウのコレクションの中に、サトウが1873年に著した『会話篇』があると報道されていた。「後身の通訳が日本語を学びやすいように書いたもので、サトウは庶民の言葉を集めていた」と湯浅茂雄氏は語っている⁽²¹⁾。それはきっとサトウが刷り上がりの頁を見せられたブラウンの『日英会話篇』を貫いている庶民言葉を重視するブラウンのアプローチにサトウが啓発を受けていたことを物語ってはいないであろうか。なぜサトウは自分の著作にブラウンのそれとほぼ同じ題名(和名)をつけたのだろうか。興味をそそられる題名の類似ではある。

ブラウンの日本での第二の出版物は、Prengergastの *Mastery System*⁽²²⁾ を日本語に適用した語学教育書であった。教授法としては、文法読解が主流だったこの時代に、オーラル・アプローチを提唱するも

S. R. ブラウンと新資料の発見により知られる「馬可傳福音書」の和訳

のであったが、この事実もやはり、ブラウンの口語への興味を証している。

ABS Mark の依拠した原典

来日以前に中国で宣教の経験のあったブラウンやヘボン、中国語を理解でき、漢文を読み下す日本人助手の能力を用いて、最初は、助手による漢訳からの和訳を用いて、聖書の和訳にとりかかった。しかし、和訳の過程は、そこで終わってはいない。それは、訳業の過程の始めであって、終わりではなかった。ブラウンは、そのようにしてできた和訳の文章を、ギリシャ語原典に照らして、綿密に校訂し、改訂に改訂を重ねていることを1865年10月31日付のJ. M. フェリスあての手紙で報告している。

現在、わたしのおもな仕事は、聖書の翻訳です。ふたりの日本語教師を、毎日、一時から五時まで雇っています。彼らは、まず、漢訳の聖書を開いて、できるかぎりよい訳をします。それから、わたしは、ギリシャ語またはヘブル語の原典と照らして、彼らと一しょにいて訳文を調べ、手元にある聖書を、わたしの力の及ぶかぎり、最も適当な訳文に訂正するのです。こんなふうには訂正して彼らのきれいに書いていたページがきたなくなるまで添削します。それに訂正は赤インクでしますから、全ページが、すぐまだらになってしまいます。日本語の教師のひとりには、もともとわたしが雇う以前から、漢訳聖書で、マタイによる福音書の訳をしていました。わたしと一しょに翻訳をしている時、彼は、その漢訳聖書をそばにおいて、参考に彼の最初の訳文を訂正するのです。わたしは、この仕事を、おずおずとやりかけたのでした。けれども、どうしてもやりとげなければならぬ、いや、わたしの生きている間にやらなければならぬ、と感じました。わた

しのやっていることを、じみにやってゆかなければならぬと思っています。マタイによる福音書を22章まで完了しました。これを始めたころ予期したよりもよくでき、そのできばえに満足しています。毎日、その仕事をやってゆくと、だんだんなれてきて、このぶんなら、もう二週間もすれば、マタイによる福音書を完了し、最後の訂正までこぎつけそうです。そうしたら、ここにいる同僚や、長崎の同労者に手渡して、批評や改訂を頼んでみます。同労の宣教師も同じようにやって、それぞれの翻訳文をわたしに送り、そうして、皆の援助を合わせて、できるだけ早く、この国民のために、聖書の部分訳を印刷するようにしましょう。⁽²³⁾

漢訳聖書から訳した和訳の文章を、ブラウンが、ギリシャ語原典に照らして、改訂を重ね、できるだけ原典に忠実な訳を志しているという歴史資料の記述を、翻訳文章の比較対照分析により、検証してみたい。

比較対照分析を行う文章には、下記を用いる。

ギリシャ語原典 公認本文 Textus Receptus テクストゥス・レケプトゥス (TR)

英語 欽定英訳 King James Version (KJV)

漢訳 代表訳 Delegates' Version (CDV)

ブリッジマン・カルバートソン Bridgman and Culbertson
訳 (CVBC)

1864年北京版 ロシア宣教師訳 (RMP)

和訳 馬太福音書 春日発見版 (MtK)

馬可福音書 (ABS Mark)

ここで、初期のブラウンの訳で、火災での焼失をまぬかれたと思われる馬可福音書 (ABS Mark) 稿本と、戦後福岡で見出された馬太福音書 (火災を逃れたブラウン訳を底本とする改訂版と思われる) の

転写本の文章を、ギリシャ語原典、及び関連ある漢訳との比較対照分析により考察した。

<故春日政治博士により発見された「馬太傳福音書」の転写本について>

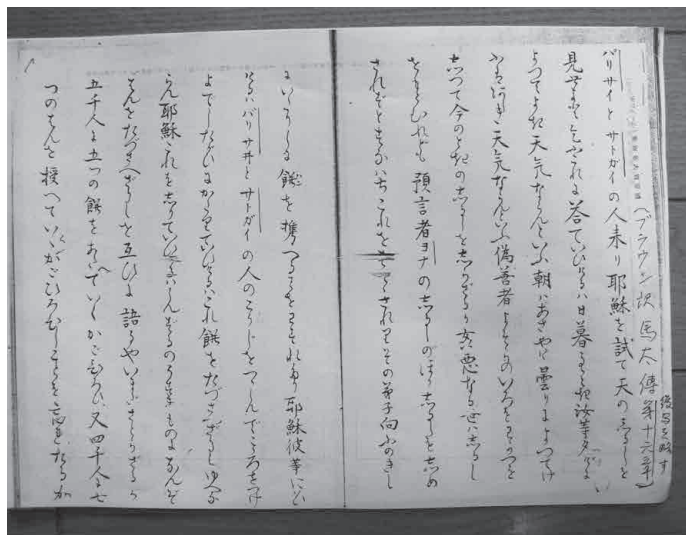


図6 春日発見の馬太傳福音書転写本
故春日和男博士所蔵

1941年に、福岡の古書店で馬太傳福音書の和訳稿本の転写本が春日政治博士により発見された。誰の訳業であるかについては、研究者間で議論があるが、「ブラウン氏訳、バラ氏、タムソン氏、ヘボン氏 同校」と奥野昌綱の筆で記されてあるので、ブラウン訳をヘボン、バラ、タムソンが改訂したものと考えられる。これをヘボンの訳とする高谷道男の説－ヘボンの帰米中に、奥野をブラウンの日本語教師として紹介したので、奥野がブラウンに配慮して、ブラウンを先頭に、ヘボンを末尾においたものとする－は、餘にも主観的として笹渕友一、海老澤有道に

より斥けられたが、これは1867年に焼失した訳稿の転写本がたまたま残っていたものであり、聖書訳史上最初の馬太傳福音書の和訳であり、「1867年以前の和訳の姿をそこに見ることができる」という春日の説も、海老澤は「そのままには採り難い」という。それは「訳文が、そうした時期の訳としては、あまりにも漢訳から脱しているからであり…訳文がこなれているからである…これは、焼失をまぬかれたブラウン訳を、ヘボンがバラ、タムソンら三人で9か月を要して訳したという改訂校の転写本ではあるまいか」という。⁽²⁴⁾

ABS Markとこの馬太傳稿本の転写本との比較分析をすると、まず漢語表記の用い方で歴然とした差異がある。漢語数の概念語全体の数に対する割合を見てみると、前者が85%であるのに対して、後者は57%と格段に低い。この一件だけでも、春日発見の馬太傳福音書稿本の転写本は、文体が漢訳から脱しているという海老澤の指摘が裏づけられる。従って、この馬太傳福音書稿本の転写本は、ブラウンの訳稿を底本とするヘボン、バラ、タムソンによる改訂版であると考えられる。

この馬太傳福音書の訳とABS Markは、ともにブラウンの訳業を示すものであると思われるが、福音書の記者が異なるので、共通のメッセージをになう部分の和訳を、ギリシャ語原典と英訳、漢訳と比較検討することにする。それはバプテスマのヨハネが自分の後にくるイエス・キリストについて語る場面で、馬太傳福音書 (MtK) では3章11節、馬可傳福音書 (ABS Mark) では、1章7節である。

Matthew 3 : 11

TR : ὁ δὲ ὀπίσω μου ἐρχόμενος ἰσχυρότερός μου ἐστίν,

AV : but he that cometh after me is mightier than I,

CVBC : 後我而来者。更勝於我。

CDV : 後我来者，更勝於我

1864 RMP：後我来者，更強於我

MtK：我より後に　きたる者、　我にまさ禮、

Mark 1：7

TR：'Ερχεται ὁ ἰσχυρότερός μου ὀπίσω μου,

AV：There cometh one mightier than I after me,

CVBC：有一後我而来者，勝於我也，

CDV：後我来者，更勝於我，

1864：RMP：後我来者，更強於我，

ABS Mark：我より勝れたるもの　^{われ　すぐ}　^{われ　のち　きた}　我的後に来る。

両者の原文を比較すると、双方とも意味内容のレベルでは、全く同一であるが、シンタックス（文末脚注14参照）上のレベルでは、歴然とした差異がある。「キリストがおいでになる」というメッセージになう「来る」という動詞 *ἔρχομαι* は馬可傳福音書では、主要動詞として、文頭に *ἔρχεται* として置かれている。普通、この位置での主要動詞の現在形は、継続の動きを表現する。文頭に置かれた主要動詞として、強調の語気を持ち、「来る」というメッセージの緊迫性を伝えている。一方、馬太傳福音書の3：11では、同一の動詞が名詞節の中で、主語を修飾する動詞として分詞形で用いられ、'the one coming after me'，「我的後に来る者」という名詞節の構成要素となり、その名詞節は、その文の主語として機能し、その後に「我より優れている」という形容詞述語が続いている。

和訳に目を転じると、このシンタックスの違いは、ABS Markにも、春日版馬太傳福音書（MtK）にもよく反映され、両者ともギリシャ語原典の構造をも、忠実に伝える訳をしていることに気づかせてくれる。馬太傳福音書の例では、春日版の複雑な形容詞文への翻訳「我的後に来

たる者は 我に勝れり」は、ギリシャ語TRのシンタックスを漢訳のシンタックスより正確に反映している。漢訳（CVBC）においては、ギリシャ語原典の複文が二つの節に訳され、各節には、ピリオドが打たれている。独立した単文が並んでいるようである。「後我時来者。更勝於我。」

ABS Markのギリシャ語原典への忠実さは、和訳では、動詞文への訳に明確に見られる。この日本語への訳は、原典に近い、自然な等価に達している。日本語の生来の語順がSOV（Subject-Object-Verb）であるために、主要動詞が、ギリシャ語原典のように文頭ではなく、文末に置かれるのは致し方のないことである。しかし、日本語では、主要動詞は、文末に置かれつつも、そこから文の他の構成要素に決定的な影響力をもち、働きかけ、コントロールをしていく。文末の動詞の時制、丁寧さ、モードなどが、他の動詞のそれをコントロールして、文のメッセージの内容やトーンを決定づけるのである。

マルコ傳1:7のシンタックスにおいて、ABS Markの和訳は、当時の和訳に影響を与えたと一般に考えられている他のどの漢訳—即ち、ブリッジマン・カルバートソン訳、代表訳、1864年北京版ロシア宣教師訳よりも、ギリシャ語のTRに近い、字義どおりの訳を呈している。当時の日本人エリート層に人気のあった代表訳と、1864年ロシア宣教師版は、ギリシャ語原典のTRに見られるマルコ傳とマタイ傳の両者間のシンタックス上の差異には注意を払わず、マタイ3:11とマルコ1:7に同一の漢訳を与えている。CVBCは、ギリシャ語原典に見られる両者間のシンタックス上の違いに配慮し、マルコ1:7には、新しい意味内容をもつ「有一」"there was one"「一人の者があった」という動詞を文頭にもってきて、原文の強調—英訳での"There"で表現された語気を反映している。しかし、漢訳が新しい一句の挿入により問題解決を図ったのに比して、ABS Markの訳者は、新しい要素を和訳に加えなかった。この一例にも、ABS Markと春日版馬太傳が、ギリシャ語原

典のTRに忠実に、字義どおりに原典に従って和訳されたことが明らかである。

マタイ3:11とマルコ1:7に見る上記の和訳の例は、S. R. ブラウンによる初期の和訳が、ギリシャ語原典の公認本文テキスト・レケプトゥスに準拠しており、漢訳聖書からの重訳ではないことを示している。事実、初期の和訳において、翻訳者たちは、自らの母語とかけ離れた日本語というような言語への翻訳に際して、既にあった漢訳聖書を利用し、自らの中国語の知識と日本人助手の漢文の知識を活用するアプローチをとり、それは効果的であった。しかし、これは、和訳の過程での到達点ではなく、通過点であった。翻訳者たちは、日本人助手の漢訳聖書からの和訳を、ギリシャ語原典と比べて、綿密な改訂を施し、さらに日本語らしい日本語に推敲していったのである。

最後に、もう一点、ABS Markの和訳の大きな特徴ともいえる点に触れておきたい。それは、馬可傳福音書1:10のイエス・キリストがヨルダン川で、ヨハネからバプテスマを受ける場面の翻訳である。ABS Markによれば、イエスが水から上がった時に、天が分かれて、聖霊が鳩のような形で降りてくるのを見たのは、イエスではなく、ヨハネであった。Rhodesは、これはギリシャ語原典をこのように読んだこともありえなくはないが、それより、ヨハネ福音書1:32-34との調和を図ったのであろうという。

Rhodesによれば、この解釈は、古い時代の英語聖書、即ち、ティンダル(William Tyndale 1526)とジュネーブ版英語聖書(1560)、ロシア宗教会議版Synodal Version(1824版以降。スラブ人教会版ではなく)また1923年のヘルマン・メンゲ(Hermann Menge)によるドイツ語聖書でとられているが、ロシア教団による1894年のブリッジマン・カルバートソン漢訳の訓点版や、ニコライ主教(Dr. Kasatkin)

の1901年の日本語聖書にも見当たらないという。⁽²⁵⁾

しかし、英国聖書協会での調査で、筆者は、天が開けて、聖霊が鳩の形をとってイエスの上に降りてきたのを見たのは、ヨハネであったという訳をしている漢訳聖書を見いだした。それは1864年のロシア宣教師による漢訳北京版で、この版は、ブラウンの訳業の時期に出版されているので、ブラウンが入手することは可能だったことを確認することができた。この件は、漢訳聖書の影響が小さくはないことを物語っている。ちなみに、1895年に出版されたローマ・カトリック教会の馬可福音書は、ヴルガータを原典としているので、この解釈をとってはいない。

重要なことは、ABS Markの1864年ロシア教会版とのマルコ1:10における一致が、このABS Mark稿本の年代を規定するのに役立ったということである。稿本の完成時期は、1864年のロシア教会版の出版後で、しかも1867年4月の火災の前、即ち、1865年から1867年4月の間でなければならない。ブラウンは、1867年2月に、馬太傳福音書の4回目の改訂を終了し、馬可傳福音書の3回目の改訂を行っている事実を報じている。5月には、米国聖書協会からの指針に従って、同僚との協働作業での翻訳にかかれようとも述べている。従って、訳稿の完成は、1867年2月の後で、火災の直前、即ち1867年3月であろうと考えられる。

しかし、ABS Markは、この1864年刊ロシア教会版にすっかり依拠していたわけではない。漢訳聖書との関係を調べると、ABS Markに最も影響を与えていたのは、ブリッジマン・カルバートソン訳であり、メドハースト、ギュッツラフ、ブリッジマン、モリソン Jr.による改訳中国語聖書の影響もみられる。

マルコ福音書1:10に関しては、時代が大きく下るが、成瀬武史が、戦後の新改訳聖書(1970年)の訳についてコメントしているのを、ここで見てみたいと思う。成瀬は、現今まで訳された日本語聖書が、日本語としてこなれていない表現が多いという気づきから、その問題を解消

するために、この部分を、イエスを主題化して明示して訳すことを提唱している。

「敬体」と称する新改訳の敬意をこめた表現様式は、ちょうど（無愛想な）共同訳を裏返しにしたような印象をあたえる。一方、くどい印象は、原文の文頭に頻出する *kai* を直訳したものと思われる「そして」と、こま切れに文中に読点を入れることからくる。その特徴が二つながら見られる1章10節の全文を新改訳と私が提案したい訳文を並べて示そう：

〔新改訳〕 そして、水の中から上がられると、すぐそのとき、天が裂けて御霊が鳩のように自分の上に下られるのを、ご覧になった。

〔私訳〕 イエスは水から上がられると、すぐ天が開け、聖霊が鳩のように自分の上に降りてくるのをご覧になった。

GNTでは、この文も新改訳のように「そして」で始まっている。しかし直前（9節）の「イエスは…ヨハネからバプテスマをお受けになった」という文の情報の焦点を「イエスは」と主題化すれば、これら二つの文は自然につながり、流れがよくなる。「わかりやすく翻訳しよう」とすれば、原語から訳語への語句の言い換えだけでなく、自然な訳文の構成にとって必要な場合は、文の連結を含む統語上の調整にも踏みこまなければならない。⁽²⁶⁾

確かに、主題化は、日本語の特徴を活用したよい案ではあり、そうすれば、日本語としては、わかりやすく、読みやすくなるが、これまでの聖書和訳に、日本語としてこなれていない表現が多かったのは、一つの理由として、訳が、原文の統語構造にも忠実であろうとすることばかりがあったからではないだろうか。

Gerald Hammondは書いている。

What we seem to have are two opposing philosophies of

translation. One, reflected in different ways in the Geneva Bible and the New English Bible, argues that the context should define the word the translator employs. The other view, the Authorized Version [King James' Version] 's, proposes that there are repetitive patterns which a translator should not upset or obscure: in so far as it is possible, the translator should aim for a word-to-word consistency.⁽²⁷⁾

我々がもっていると思われるのは翻訳の二つの相対する哲学である。一つは、ジュネーヴ版聖書やNEBに反映されているが、文脈が翻訳者の使う言葉を定義すると論ずる。他方はKJVの視点で、翻訳者が遮ったり、見えなくしてはならない繰り返しのパターンがあり、可能なかぎり、翻訳者は言葉から言葉へ（字義どおり）の一貫性をめざすべきであるというものである。[拙訳]

特に明治期には、「字義どおりの翻訳」が翻訳の方針としてとられていた。主題化は、左枝分かれ言語の日本語に訳そうとする場合、よい解決法ではあるが、他方、このハモンドの引用も、示唆に富む言葉であると思う。

結びのことば

新資料、馬可傳福音書（ABS Manuscript of Mark）の和訳は、漢字の多用、古い形の平仮名の使用、漢文の影響などから、これまで聖書の和訳史上、最古の馬可傳福音書と考えられてきた1872年刊行の『馬可傳福音書』より古い和訳であることが判明した。従って、現在知られる聖書の和訳史上、日本本土で訳された最古の馬可傳福音書の稿本である。その訳文の、ギリシャ語原典や、関連する英訳、漢訳との比較対照

分析は、これが、ギリシャ語原典の公認本文に内容、形式上とも忠実であり、日本人助手による漢訳からの訳を、ギリシャ語聖書を参照して改訂に改訂を重ねたというブラウン自身の言葉を裏付けるものであることが確認された。日本語の文章には、口語体が混じり、学問的アプローチとともに、日本語の口語表現に関心をもっていたS. R. ブラウンの訳業であると結論づけられる。当時としてはわかりやすい日本語文章になっており、そのような翻訳をめざしたブラウンの言葉と合致する訳業である。1872年刊の馬可傳とは、共通点が多くみられるだけに、相違点は、多くを物語っている。ABS Manuscript of Mark馬可傳福音書の稿本は、初期のブラウン訳の姿を彷彿とさせ、聖書和訳に関する志と献身を具現化した訳業であると思われる。この馬可傳福音書の稿本の発見は、聖書と訳史上のギャップを埋める、ミッシングリンクの発見であった。

注

- (1) American Bible Society, Philadelphia, Accession no. 213680.
- (2) Otis Cary, *A History of Christianity in Japan*, vol.II, 『日本プロテスタント宣教史』江尻弘訳, 教文館, 2010年, 122頁。
- (3) W. E. Griffis, *The Maker of the New Orient*, 渡辺省三訳『われに百の命あらば』キリスト新聞社, 1985年, 218頁。
- (4) 高谷道男『S. R. ブラウン書簡集』日本基督教団出版局, 1965年, 190頁
- (5) 1861年2月14日の米国聖書協会 (ABS) 宛のヘボンの手紙 (高谷道男『ヘボン書簡集』岩波書店, 1959年) 72頁。
- (6) 前掲書, 127頁。
- (7) 『S. R. ブラウン書簡集』163頁, 167頁。
- (8) 高谷道男1868年の書簡。英国聖書協会報1868年。200-202頁 (前掲書228-29頁)

- (9) 前掲, 180頁。
- (10) 海老澤有道『日本の聖書』日本基督教団出版局, 1981年, 173頁。
- (11) *The Christian Intelligencer*, New York, May 24, 1866.
- (12) 『S. R. ブラウン書簡集』225, 229頁
- (13) 前掲書229頁及び『ヘボン書簡集』187頁。
- (14) シンタックス, 或は, 統語とは, 語と語, 辞, 句, 節がどのように組み合わさって, 意味関係を示し, 文を構成しているかにかかわる, 文を作る時の規則。または, それを研究する文法論の領域。時には, 文と文との関係にも及ぶ。
- (15) 『S. R. ブラウン書簡集』229頁。
- (16) Hills, Margaret, 'Text and Translation, 1861-1900', ABS Historical Essays, No.16, IV-G-1, 1 (New York, ABS 1965) , p. 4.
- (17) 『S. R. ブラウン書簡集』228-29頁。
- (18) 海老澤『日本の聖書』171頁。坂田精一は, 「会話体日本語」としている(アーネスト・サトウ著, *A Diplomat in Japan*, 坂田精一訳 『一外交官の見た明治維新』(上) 岩波文庫, 1960年, 68頁)。
- (19) 『われに百の命あらば』126頁。
- (20) 前掲書126-27頁。
- (21) 「ウチの教授 実践女子大 湯浅茂雄さん 激変した日本語の歴史探る」毎日新聞2015年9月8日。
- (22) Prendergast, *Mastery System, Adapted to the Study of Japanese and English* (Yokohama, F. R. Wetmore, 1875) .
- (23) 『S. R. ブラウン書簡集』162-63頁。
- (24) 海老澤有道『日本の聖書』日本基督教団出版局, 1981年, 175頁。
- (25) Rhodesの中井への書信(2003年8月15日付)。
- (26) 成瀬武史「聖書の改訳に何を求めるか? 『聖書 新改訳 引照・注付』(2003)に思う」明治学院大学キリスト教研究所『紀要』第37号, 明治学院大学キリスト教研究所, 2005年3月, 31-32頁。
- (27) Gerald Hammond, *Making of the English Bible* (Manchester: Carcanet New Press, 1982), p. 2.

S. R. ブラウンと新資料の発見により知られる「馬可傳福音書」の和訳

本論考のために使用した貴重資料，故春日政治博士発見による馬太傳福音書の転写本の一部を筆写させてくださり，一部のコピーをお送りいただいた故春日和男博士に心よりお礼を申し上げます。

My sincere appreciation goes to Mr. Russell Gasero, Archivist of the Reformed Church in America, for his helpful search for the article, “Call to Prayer” in *The Christian Intelligencer*, 1866.